令和元年度調査研究報告書

知的障害者の自立に書籍を活用するための試み

長野大学　社会福祉学部
伊藤ゼミナール

F16148　矢島陸帆

指導：伊藤英一教授

目次

1. はじめに・・・・・・・・・１～２Ｐ

2. 実験の概要・・・・・・・・２～３Ｐ

3. 目的・・・・・・・・・・・３Ｐ

4. 研究方法・・・・・・・・・４～９Ｐ

5. 結果・考察・・・・・・・・９～１０Ｐ

6. 参考文献・・・・・・・・・１１Ｐ

7. 謝辞・・・・・・・・・・・１１Ｐ

1、はじめに

本研究は、「本」つまり書籍を知的障害者の日常生活に役立てるための研究である。私は書籍が好きであり、私はこれまでに、石田衣良さんや恩田陸さん、有川浩さん等の書籍を多く読んできた。そして書籍は私にとって、困難に直面した時にヒントになったり、元気のでないときに元気をくれたりする今の自分を作ってくれた大切な存在である。そして現在福祉を学ぶ上で障害分野にも興味があり、特に知的障害のある児童と書籍の関係に注目したいと考え、このテーマを設定した。

知的障害とは知的な学習や抽象的な思考、環境適応が苦手でであり、言語発達の遅れに困難があり、その中でも学習面に特徴に注目し、「具体的な事物や活動は理解できるけれど抽象的な概念の理解や思考が苦手」ではあるが、書籍という抽象的な道具を活用することにチャレンジしてみたい。そして、日常生活における各種技能を獲得することを目指し、以下の困難さを克服することができれば自立につながると考える。

① 「新しい環境への適応が難しく、状況に応じた適切な行動が苦手」であり、対人関係や集団行動での困難がある

② 「習得している言語の数が少ない、幼児語を使う等、言語の発達の遅れ」であり、対人関係や学習面での周囲との差で困難がある。

このような困難さを、書籍を活用することで学習意欲を持ち続けながら日常生活に関する技能を高めることができれば、社会生活を円滑に送ることにつながり、自立に向かうと考える。そしてその他の特徴として、視覚あるいは聴覚の優位さが顕著に見られることがある。学習面においても、優位な点を活かすことで知識はより定着しやすくなるといえる。これらを踏まえ、本人の興味や関心を示すものは何であるのかを知り、活動を促すこと、本人の発達年齢に合った支援をし、本人にできる現実的な生活に結びつく活動を通して言葉を習得することや、抽象的な思考になれていくことを、マルチメディア的な広義の書籍の活用によって、日常生活の技能を高めていくことが

可能と考えた。そのため一般的な本ではないが抽象的である書籍を通して日常生活の技能を高めたいと考えた。

障害者のための図書としては「マルチメディア DAISY」という物がある。「マルチメディア DAISY」とはパソコンのソフトを使用し、音声にテキスト・画像をシンクロさせることができ、音声のスピードや文字の大きさ、背景とのコントラストの変更や、読んでいる部分が光る等機能が多くある。この機能は文字を目で追うことが苦手である人も、ハイライト機能で読んでいる部分を追ってくれることで読みやすくなる、内容を理解することに時間がかかる人でも速度変更の機能により、自分のペースで本を読むことができる。そのため「マルチメディア DAISY」は誰でも簡単に読むことができる図書である。この「マルチメディア DAISY」を実際に学校の図書館に導入した鳥取大学附属特別支援学校では、各学級の発達年齢や興味関心ごとに「マルチメディア DAISY」を使用してもらうと、小学部では主体的に読み聞かせを楽しんでくれるようになり、中学部では、一文字ずつしか文字を読めなかった生徒が連続した文字が読めるようになり、高学部ではほとんどの生徒が難しい内容の物語を理解することができるようになったという。このことから本人の興味や関心、ペースや苦手に合わせて、機能を変えることで機能障害だけでなく、発達障害や知的障害があっても本が読みやすくなると考えた。

ただ絵と字だけが描かれた絵本だけは抽象的過ぎるため、本人にとって現実の出来事と結びけることは難しいのではないかと感じた。そこで私は、例えばファミレスで靴を脱いでしまう児童がいるとし、靴や食事の絵だけではなく、お店のマークや外観の写真を出し入れできるポケットを付けることで抽象的ではあるが、現実と結び付けやすくなるのではないかと考えた。そして、めくるたびに音が出力される機能を付けることで、視覚だけでなく聴覚にも訴えかけることができ、内容が理解しやすくなると考えた。[2)]

2、実験の概要

私は個人の「楽しい」という気持ちや「気になる」という気持ちを詰め込んだ、本人の興味関心を詰め込みながら、苦手を克服できるような本を作ってしまえば、楽しみながら本人の学習意欲を継続させることができるのではないかと考えた。そのため私は視覚と聴覚を使い、日常生活に役立てることのできる本を作りたいと考えた。書籍で日常生活の技能向上を図ることは可能であるのか、できなかったとすればなに何が足りないのか、どのように改善すべきなのか考え、改善点を踏まえ、絵本を作ってみたいと思う。絵本の内容としてはたとえば、騒いではいけない状況で大きな声が出てしまう人に対して、その人が何に興味を示しているのか、どんなことに関心をもっているのか知り、好きなキャラクターがいるならそのキャラクターが出てくる絵本、電車が好きなら電車が出てくる絵本にし、どのような場面でどのような行動をするのか、本人にもわかりやすい表現で、本をめくるたびに本文を読み上げる絵本にしたいと考えている。そして現実のことと結び付けやすいよう、写真を利用し、普段本人が利用している物や利用している場所の写真を場合によって使い分けることができるよう、写真を入れ替えられるようにしておく。そして、知的障害者が支援者や家族のいない環境において普段の生活に見通しが持てるような書籍を作成することができるのか実験を通して考察したいと考えている。

3、目的

私は相談援助実習を障害者の生活介護施設で行った際、障害と地域をつなげる支援を学んだ。障害と地域をつなげるということは障害の有無に関わらず暮らしやすい地域、だれでも暮らしやすい環境を整えることである。地域とは事業所の周りの環境、利用者の家族の周辺の環境、外出先での環境を整えることである。現在でも障害の施設ができる際に地域の方から苦情がくることがあるという。怖いというイメージがあるのだと聞いた。しかし、外出が大好きな人はたくさんいるし、散歩が大好きな人もたくさんいる。しかし、外出の際、他の人の家の畑に入ってしまう、物を移動させてしまう人がいた場合、その家の方は障害についてマイナスなイメージを持ってしまう可能性がある。そこ

で支援者としてできることはその後のケアが大切であることを学んだ。もし、苦情をいただいた場合、その場できちんと謝ること、そして、後日また謝りに伺うこと、迷惑をかけたかもしれないという場合も同様にすること等、丁寧なアフターケアを行うことで、障害の有無にかかわらず暮らしやすい地域づくりにつながることであると学んだ。

しかし、支援者や家族がいない状況になった際、人の家の畑に入ってしまう、物を移動させてしまうことは社会生活を送るうえで他の人の迷惑になってしまうのだということを分かりやすく伝えるために、視覚と聴覚に訴えかけるものがあればと思い、この研究を行いたいと考えた。

4．絵本の作成

① 「制作手順」

(1) 絵本に必要な機能を決める

(2) ページをめくると音声が出力される絵本を試作する

(3) 健常者によるページをめくる動作により、正確に機能するかを確認する

(4) 目的が叶うまで、施策を繰り返す。

② 絵本作りの試作

(1)発泡スチロール板(5 ㎜厚)を長方形に切り、三枚にする。

(2)一枚目はそのままにし、二枚目はめくることのできるよう、図 1 のように端を 1 ㎝程度縦に切り、テープを張る。

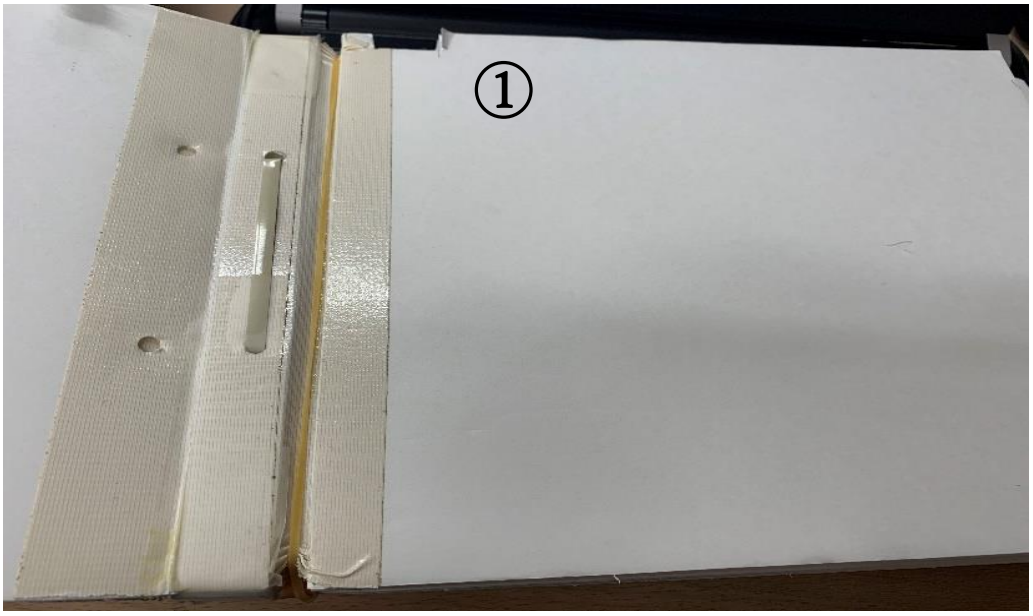


図 1　【書籍を開いた図】

(3)三枚目は図 2 のように、再生のスイッチの厚さに合わせ、発泡スチロールを三枚重ね、スイッチの厚さ分を切り取る。

(4)三枚を重ね、テープでまとめる。作ったすべてをまとめ、図 1 のように穴あけパンチで穴をあけ、まとめる。

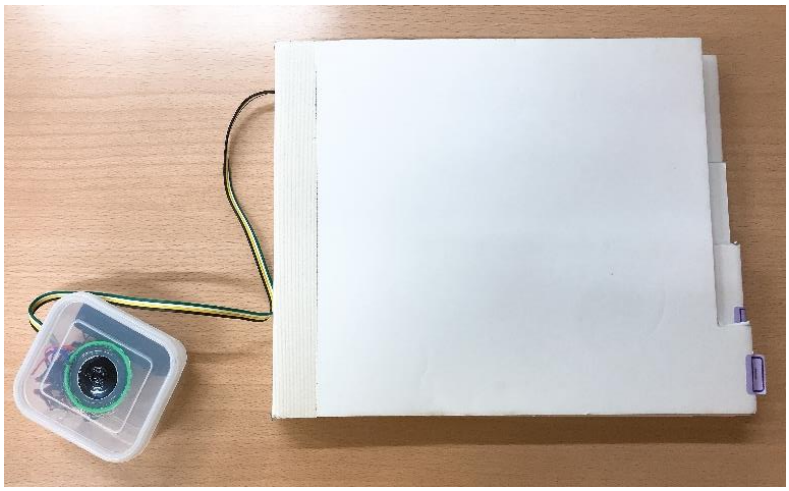
(5)開いたときにスイッチがすべて離れてしまわないように輪ゴムで圧をかける。

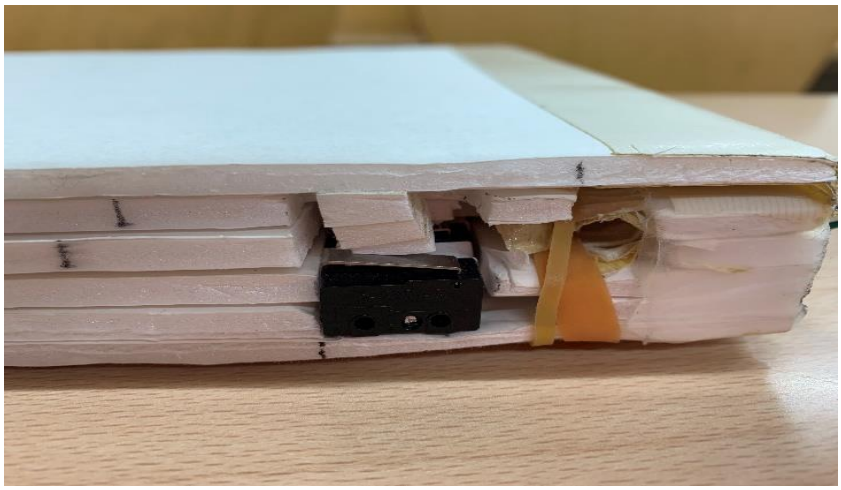
（Ⅰ）ページをめくると音声が出力されるという機能を有する絵本をどのような構造にすれば良いのかを試作により実験する。

(Ⅱ)機能の確認のみを目的とするため工作しやすい材料で試作する。

(Ⅲ)手軽に工作できる発泡スチロール版を利用して、構造を試作した。

(Ⅳ)構造的には目的を達成することができたが、軽量であり、スイッチのばねでページが浮き上がってしまい、スイッチがＯＮにならないことが判明した。





③ 絵本作り

(1) 試作の際、発泡スチロールで作成した土台をベニヤ板に変更し、②の時同様の大きさに切り、3 ページ分作成する。。

(2) ②の時同様に、3 枚のベニヤ板に切りこみを入れる。(図 4, 5)

(3) ベニヤ板に白い壁紙を張って補強する。

(4) 3 ページ目の切込み部分にスイッチを入れても目立たないよう、3 枚分程(約 1.5 ㎝)度重ね、厚みを付ける。

(5) 1 ページ目にスイッチを押すため、図 6 のような突起を付ける。

(6) 試作の時点でスイッチが押されなかったため、軽い刺激でスイッチが入るようなスイッチに変更した。

(7) (4)で厚みを付けた 3 ページ目と 2 ページ目を接合するため、3 ページ目にねじ穴をあけ、ねじで接合した。

(8) 2,3 ページ目と 1 ページ目を接合するため、テープを利用し固定した。

図 4【ベニヤ

図 5【ページ】

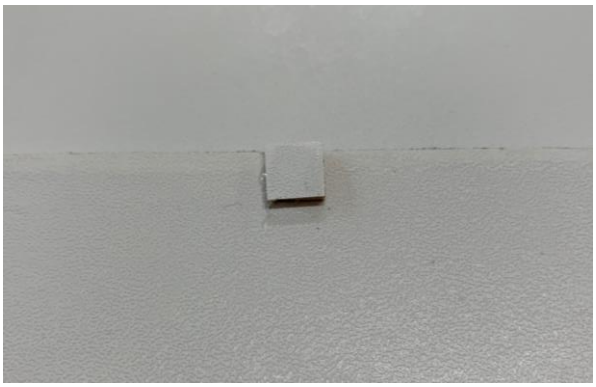


図 6【突起】

5. 実験手順

① 実験の目的

(1) 実験に協力していただく施設に、研究の目的、内容を伝え、了承をいただいた。

(2) A 市の障害者支援施設に協力していただくことになり、支援場面の確認、被験者の決定、支援に利用する写真の準備を行った。

	支援場面	調査対象	写真
休日外出	祝日に外食に出かけること	A さん	外に出るための扉 乗車予定の車 外出先の建物 外食の候補写真　（計 5 枚）
散歩	施設の周りを 30 分程散歩	B さん	外に出るための扉 靴 散歩コース　（計 3 枚）
昼食	食堂へ行く	C さん	外に出るための扉 食堂のある棟に入るための扉 食堂の内装　（計 3 枚）

(3)作成した書籍に支援場面ごとに声を録音する。

(4)作成した書籍を被験者に利用してもらう。

② 実験の手順

	障害名	性別・年齢	声掛け時間	その他
休日外出 (A さん)	自閉症	女性 (50 代)	10:00 頃	の性格は、几帳面、物事にとても丁寧に取り組む方。とても素直。 生活課題は、楽しみな事を先に知ってしまうと楽しみな気持ちが高まり興奮してしまうこと。
散歩 (B さん)	自閉症	女性 (40 代)	10:15 頃	性格は、明るく元気いっぱいです。自閉傾向は強い。 生活課題は、曖昧な予定や急な予定変更が苦手なので、しっかり前もって伝えること。
昼食	自閉症	女性	11:00 頃	、真面目な方です。次の行動の理由を理

(C さん)		(20 代)		解することで動ける方。 生活課題は、学園では、ホワイトボードに書いた予定を理解して行動に移すこと。

	実験者	被験者の反応
休日外出 (A さん)	1、挨拶、自己紹介 2、お礼を言い、協力していただきたいことを伝えた。 3、書籍を被験者の目の前の机に置き、この中には休日外出についてのことが書いてあることを伝えた。 4、書籍を開き、録音していた音声が流した。 5、写真を指差しながら実験者がもう一度外出の流れや乗車の際の確認を行った。	自室においてあるソファーに座ってゆっくりしていた。 1、「あー」とうなずく 2、「はい」と言いうなずいていた。 3、書籍を開かずに見つめていた。 4、音声が流れた後「はい」と実験者のほうを向きうなずいた。 5、実験者の声掛けを繰り返し、「はい」とうなずいていた。
散歩 (B さん)	1、挨拶、自己紹介 2、お礼を言い、協力していただきたいことを伝えた。 3、書籍をベッドの上に置いた	自室のベッドで寝ていたところを職員さんに声をかけられ起床したところだった 1、毛布をどけて書籍を置く場所を作ってくれた。 2、実験者の方をじっと見たまま動かなかった。 3、書籍をじっと見つめていた。

	4、実験者が書籍を開き、音声に合わせ写真の指差しを行った。 5、実験者が「行きますか？」と声掛けを行った。	4、実験者の声掛けを繰り返し、写真と実験者を交互に見つめていた。 5、「行きますか」と実験者の言った言葉を繰り返し、布団から出て、靴下をはき、上着を着て部屋を出た。
昼食 (C さん)	1、挨拶、自己紹介 2、お礼を言い、協力していただきたいことを伝えた。 3、ソファーの上に書籍を置いた。 4、書籍を広げ、音声に合わせ指差しを行った。(特に 11:30 頃に廊下に出ること、12:00 に昼食であること等、具体的な時間を注意して確認した)	散歩を終え、ホールのソファーで座っていた。 1、目を合わせうなずき、すぐに目をそらしていた。 2、目を合わせうなずき、すぐに目をそらしていた。 3、被験者は書籍を一瞥しただけで書籍に触れる様子は見られなかった。 4、書籍の方は見なかったが、音声や実験者の声掛けにはうなずいていた。 5、11:30 頃に廊下に行き、廊下の掲示物を眺めていた。

5.結果・考察

めくるたびに読み上げる機能が付いた絵本づくりを進めていき、実験を行い、達成できたことも多いが、何点も課題が見つかった。

まず、実験の結果として書籍本体については当日に写真を入れたことにより、ページの厚さが増してしまいスイッチが押されない不具合が出てしまった。しかし、音声の録音、再生はスムーズに行うことができた。A さんは実験者の声掛け、音声に「はい」やうなずきなど反応をしてくれていた。実験を行った後、スムーズに休日外出を楽しむことができていたと報告があった。B さんは実験後、一緒に散歩に行ったのだが、書籍を見た後すぐに準備をはじめ、靴を履いて外に出ていた。散歩の間も他の利用者と一緒に最後まで歩ききっていた。

そして、考察としては実験前の「書籍に興味をもってもらえるか」という不安は、被験者全員が書籍を目で追う、見つめる仕草を見せていたため、書籍に興味をもってもらえたのではないかと感じた。A さんは寝起きであったが、集中した様子で書籍を見てくれており、音声や写真だけでなく指差しの支援も行ったことで言葉の繰り返しも増えたため理解してくれたのではないかと考える。C さんは書籍の音声にも「はい」と反応してくれていた。音声を再生している間は書籍の方を見てはくれなかったが、声に反応はしてくれており、事前に告知していた 11:30 には廊下に出ていたことからも理解してくれたのではないかと考えている。しかし、実験後に職員から C さんは少し人見知りであることを聞かされた。書籍を見てほしくて少し距離感が近すぎてしまったため、職員さんとは目を見て話す C さんが私とは目が合わなかった。

これらのことからこの実験のテーマである「知的障害者の自立に書籍を役立てる」ことは達成できたように感じた。しかし、今回の被験者は何十年も協力いただいた施設で生活をしており、施設での生活に慣れているという事もあり、今回の実験はスムーズに行うことができたのではないかと考える。今回の反省点としては、実験準備を当日のことを考え、もっと入念に行っておくこと。そして、C さんのように文字の方が、見通しが立ちやすい方がいることを視野に入れていなかったこと。実験に集中しすぎて初対面の距離感を間違えてしまったことである。

今回の実験を通し、知的障害者の支援に書籍を役立てることはできると感じた。だが、支援者のいない環境で、知的障害者が急な予定変更等も見通しをもった生活ができるのかまでは実験することができなかったことがこれからの課題である。

6. 参考文献

１）トーディス・ウーリアセーター著　　藤田雅子・乾侑美子訳　(1989.３)
「本は友だち　－障害をもつ子どもと本の出会いのために」　株式会社偕成社

２）コニー＝マグヌッソン・ヒルド＝ロレンツィ著　橋本善郎訳　(2002.9.25)
「機能障害をもつ人たちの余暇　スウェーデンのレクリエーション」
株式会社明石書店

３）鳥取大学附属特別支援学校　　児島陽子　入川加代子
「知的支援学校における実践事例　知的な遅れがある子どもたちにも読書の楽しさを！
―学校図書館オリエンテーションでの活用を通して」
わいわい文庫２　066～073 頁
http://www.itc-zaidan.or.jp/pdf/ebook/waiwai_katsuyou2_066_073.pdf　2018.5.27

４）Copyright(C)2006　日本図書館協会障害者サービス委員会
「「マルチメディアＤＡＩＳＹ（デイジー)」や「やさしく読める本」を知っていますか」
https://www.jla.or.jp/portals/0/html/lsh/redheel.html　2018.5.27

7. 謝辞

最後に、この研究をゼミナール論文として形にすることができたのも、実験を温かく見守り、適切な指導をしていただいた伊藤英一教授のおかげです。心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞に代えさせていただきます。

長野大学社会福祉学部
伊藤専門ゼミナール報告書

令和 2 年 3 月発行

本件に対する問い合わせ先：

長野大学社会福祉学部社会福祉学科
伊藤英一(教授)
http://www2.nagano.ac.jp/ito/
長野県上田市下之郷 658－1
0268－39－0001